

第9回幼児教育実践学会（2018年8月18日）

遊び保育が育む幼稚園生活  
～遊び保育への変更によって、  
保育はどのように変容したか～

認定こども園 星の子幼稚園 園長 上村毅  
認定こども園 星の子幼稚園 主幹教諭 長山 梨恵  
北海道文教大学こども発達学科・  
札幌大谷大学 非常勤講師 酒井 義信

## 1. 星の子幼稚園のこと

昭和53年 創立  
平成28年4月から  
幼稚園型認定こども園  
に移行  
園児数  
年長81名  
年中70名  
年少75名  
満3歳児 10名 9クラス  
教員  
年長 3クラス 6人  
年中 2クラス 6人  
年少 3クラス 9人  
満3歳児 1クラス 3人



## 支援が必要な子どもに対して

# 2013年度の2学期から「学びの物語」を使った支援の研究。

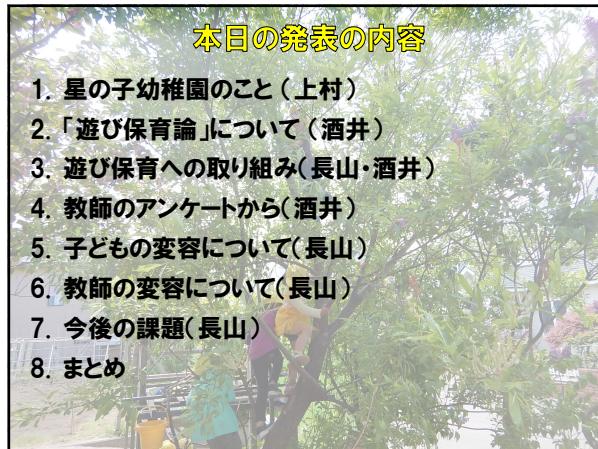
2014年度以前は、支援が必要な子どもに対して、毎日記録を取って、様子を伝えていた。写真なし。

「信頼モデル」による記録、評価は障害児保育実践をどう変えるのか

-「学びの物語」作成による半年間の保育実践からの検討 -  
保育学研究, 55(1), 55-67. 吉川和幸・上村毅・川田学(2017)

## 本日の発表の内容

1. 星の子幼稚園のこと（上村）
  2. 「遊び保育論」について（酒井）
  3. 遊び保育への取り組み（長山・酒井）
  4. 教師のアンケートから（酒井）
  5. 子どもの変容について（長山）
  6. 教師の変容について（長山）
  7. 今後の課題（長山）
  - 8.まとめ



## これまでの取り組み

**2012年まで** クラスだよりや保護者へのお知らせなどのほとんどが手書きであった(保育や子どもの写真はなし)。

2013年 ▶ 「学びの物語」による支援を要する子どもの記録の研究を実施する。

2014年

- おたより、お知らせ、保育記録などの全てPCで作成するようになる。
- 「学びの物語」による支援の記録を本格的に導入する。
- バスキャッチ(バスの運行状況を保護者に知らせるソフト)を導入し、1クラスで、保育の内容を知らせるお便りを保護者へ配信する。
- 年中の1クラスで、遊び開発開始

**2015年** > 全クラスで週1回保育の内容を知らせるお便りをメールで配信する。  
> 年長でも引き続き、遊び保育。週3回、朝の遊びを延長。クラスで遊べるようになる。

2016年 ▷ 2学期から、クラスごとの日案をクラウドで共有する。  
▷ 遊びを中心とした保育に移行。

2017年 ▶ 学年ごとの日案をクラウドで共有する。  
▶ バスキャッチによる保育のおたよりの配信を週2回以上にする。  
▶ クラスだよりを月2回作成する(写真を多く載せ、カラーに)。

## 2016年度2学期からクラウド化

件名 : 小さな心で～葛藤～

## 2. 「遊び保育論」について

### ＜最初に園を参観して＞

- ・特別支援教育に力を入れていたので、子どもへの声かけや援助の方法がしっかりとしている。
  - ・支援の必要な子ども一人ひとりを理解して保育に当たっている。
  - ・教師・職員間での声かけが多く温かい集団。

○遊び保育の下地がつくれられていると感じた。

『遊び保育論』 小川博久(東京学芸大学名誉教授) 萌文書林に基づいて研修を進める。(2015年10月の研修から)

- ポイント①遊びの重要性
- ポイント②遊び集団の育成（遊びの伝承のために）
- ポイント③身体的同調（「ノリの共有」）を育む

## 2. 「遊び保育論」について

## ポイント①

### (1)遊び(主体的な遊び)の重要性

## ～「なぜ、遊びが幼児には必要か」～

幼児期の遊びは、幼児期に合った学びだから

・言語中心の学習は幼児に適さない（言語理

- ・言語による一斉の指導は、幼児一人ひとりの体験や興味が違うので、一人ひとりに応じた指導がむずかしい
  - ・幼児の主体的な学びが効果的（興味・関心 ⇒ 意欲）

## ポイント①-2

### (1)遊びの重要性(主体的な遊び)

「遊びという学習」の効用について。まず、学習ということについて明確にすると

遊びの方法を端的に分類すると、

①教えられて学ぶ学習（教授=学習）

②自ら観察や体験を通して学ぶ学習（状況的学習）

になります。

## ポイント①-3

### (1)遊び(主体的な遊び)の重要性

大人は学校での学習を思い出して、教えられて学ぶ学習を思い起こし、今の自分があるのはいろいろな知識を教えられて身につけたからだと納得する方が多いでしょう。そのため、早くから子どもにも、いろいろな知識を身につけてもらおうと習い事に通わせようと考える方がいるでしょう。

しかし、生きるために多くのを、幼児は見てまねることで学び取っているのです。たとえば、ハイハイすること、ヨコヨチ歩きをすること、大人のように箸を使って食物を食すること、大人のように下着をつけたり、洋服を着たりなど、すべて大人のすることを見てまねているのです。

## ポイント①-4

日本語をしゃべれるのも、日本語を話す大人に囲まれているからです。教えられて身につけることもあります、多くは自分で遊びながら身につけているのです。

あまり遊んだ経験のない親は、子どもの教育を考えるときに、自分が受けた教育が大人から教えられた経験がほとんどであったことから、子どもを育てるとも、教えることだと信じやすいのです。そして、気がついてみたら、現代の若者は幼児期から大学生になるまで自分でやってみて自分で判断して行動し、そのことを学び、自分で考えるといった機会を失っているのです。

こうした状況において、幼稚園教育要領でも、遊び中心の保育の重要性が。

## ポイント②

遊びを定義すると

- ①遊びは、遊び手が自ら選んで取り組む活動
- ②遊び手が他の目的にやる活動ではなく、遊ぶこと自体が目的となる活動
- ③その活動 자체が、楽しいとか喜びという感情に結びつく活動
- ④遊びは自ら進んでその活動に参加しなければ味わうことができない

この定義からすると、遊びは教えることができないもの。

遊びの自発性という原則に反するから。

では、子どもが昔のように遊ばなくなっている現在、遊びを再生するにはどのようにしたらよいのか。

## ポイント②-2

遊びが失われた要因として、仲間、時間、場所(空間)が挙げられているが、幼児教育の場では、この3つの要因が存在している。しかし、遊びを教える場になっているのが現状ではないか。しかし、遊びは教えるものではない。

教える以外に遊びを再生するには、ひと昔の遊びがそうであったように、ガキ大将を中心とした地域での異年齢集団による遊びの伝承の仕組みを参考に、集団づくりを取り入れて行おうと考えたのが小川理論による「遊び保育論」。

## (2)遊び集団の育成 ①

### 1)遊びの伝承は「見てまねる」から（コーナー保育）

○クラス内に遊びコーナーを設ける。(3~4つのコーナー：制作コーナー、ままごとコーナー、積み木コーナーを基本に)

○お互いのコーナーは、互いに「見る⇒見られる」ように配置する。



・保育者は「制作コーナー」で壁を背にして座る。(全体が見渡せるように)

## (2)遊び集団の育成 ②

◎放っておいて遊びは継続されないので、最初は**モデルが必要**。

(保育者、クラスの子ども同士、年長児の遊び)

「見る⇒見られる」関係からお互いがモデルとなり、**遊びが伝承**される。

【幼児全員が遊び環境の構成員】

2)遊びを継続させるために

○保育者の援助の例

①季節ごとの遊びに興味をもつように、絵本や材料を置いておく。

②制作コーナーで保育者が制作しているモノを見習って制作し、それを使って遊びへと発展。

③コーナーでの遊びの発展を予想し、道具や材料などを準備して環境を工夫する。

④保育者が各コーナーを回り、一緒に遊んだりして援助する。

⑤時々、各コーナーに視線を送り、顔を上げた幼児とアイコンタクトをとて安心感を与える。

## (2)遊び集団の育成③

3)子どもの遊びを誘発するために

①保育者が遊びの**あこがれの存在**になる。

(先生が〇〇を作っている姿がかっこいい)

②子どもが**モノを持つこと**によって**遊びが生まれやすい**。

(紙を細く巻いて→ 剣に、魔法の杖に、バトンに、などに見立てる:自分でそのモノを作っている最中にイメージをもって何かに見立てたりするので、ごっこ遊びが生まれやすい)

③制作する保育者は、あこがれの対象となるように動作を大きく楽しそうに。

(保育者は、**遊びを楽しむパフォーマー**であることが求められる)

## (3)身体的同調を育む活動の重視①

～「ノリの共有」による遊び集団の育成～

子ども集団の**人間関係づくりが遊びには大切**。保育者と幼児集団との同型的同調や同型的応答が成立するのは、ノリという身体機制によって保育者と幼児集団との連帯性がつくられることになる、との説に基づいて

毎日、歌、手遊び、絵本の読み聞かせ、素話などを繰り返すことにより「**内的秩序感覚**」が成立して、幼児たちがクラス集団の中に共同体的絆がつくれてくる。そして、保育者と幼児一人ひとりとの絆づくりにも有効となる。

## (3)身体的同調を育む活動の重視②

～「ノリの共有」による遊び集団の育成～

具体的な例としては、

幼児たちが毎日、教師と共に手遊びに慣れてノッてくるにつれ、逸脱行動が少なくなり、笑顔が見られるようになったりする。

絵本の「**大きななかぶ**」を読んでいるとき、「うんとこしょ、どっこいしょ」といったかけ声を幼児たちが唱和して同調が生まれたりする。

※「ノリ」とは、「**関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズム、およびその顕在の程度、すなわちリズム感、また身体と世界の関係から生み出される調子、気分のこと**」。

(岩田遵子:東京都市大学教授)

## (3)身体的同調を育む活動の重視③

◎クラスの中で取り組む具体例

1)クラスの幼児集団で、楽しいことを毎日繰り返し行う。

(手遊び、わらべ歌、ゲーム、クイズ、など)

2)入園当時、安定した同調的関係がある家族集団から離れて初めて、(外部の人間の意図でつくられた)クラス集団への移行を経験することになる。

同調関係のある家族集団とは違って、まだ同調関係がない園の対人関係の中に投げ込まれるという感覚であろう。この段差を強く感じる幼児は、入園とともに激しく抵抗したり、泣きわめいたりすることも見受けられる。

## (3)身体的同調を育む活動の重視④

◎クラスの中で取り組む具体例

例えば、

・保育者と親があたかも既知の親しい関係のような同調性を演出し合う。(朝、お母さんと挨拶し、笑顔で親しげにお話をする、など)

・子どもの下の名前を呼んで(今までには親しい家族にしか呼ばれてない)、その子の固有名詞の名前を知っている既知の関係だと思わせる。

(幼児の顔と名前を早く覚えるための工夫も大切)

## (3)身体的同調を育む活動の重視⑤

◎クラスの中で取り組む具体例

## 3)集団の中での配慮

- ・クラスでお集まりの時、いつも集まつた**集団の後ろや端に座る子ども**は、保育者と**少し距離を感じている子**の場合がある。
- 同じような子がいつも集団と離れる形で座る場合は、「さあ、お話をしたいんだけど、みんな集まつたかな」と言いながら、後ろや端に座っている子に「**Aちゃん集まつたね**」「**Bちゃんもいるね**」「**Cちゃん元気**」などという声かけをすることも大切である。
- この手法は、昔から行われた集団行動を統制する方法であるが、この働きかけは、その働きにかぎらず、一人一人の幼児への気配りという意味をもっている。

## (3)身体的同調を育む活動の重視⑥

◎クラスの中で取り組む具体例

## 4)個とのプライベートなかかわり

- 一人一人への気配りは、保育者と幼児との相互コミュニケーションを保障するので、丁寧に行なうことが求められる。
- ・登園時、降園時における挨拶（アイコンタクトやハイタッチを交わす、一声かける、など）
- ・ある子のプライベートな話をみんなに知らせる（○○ちゃんのお家で飼っている猫のミミちゃんに3匹の赤ちゃんが生まれたんだって、とイントロを教師が話して、そのあとを○○ちゃんに話してもらう、など）
- ⇒ 保育者と○○ちゃん、○○ちゃんとクラスの子どもたちとの人間関係の絆を深くする。

## 3.遊び保育への取り組み

## 実践のあゆみ①

## 1)コーナー保育

～遊び主体の保育～

- ・各クラスでコーナーを設置し、コーナーによる自由遊びを行う。
- ・「見る⇒見られる」ように環境構成を工夫

## 実践のあゆみ②

## 2)集まり(朝・帰りの会)の取り組み

～遊び・生活を共有～

- ・遊びから片付け、そして自然に集まりへ
- ・子どもが司会をしたり、発表する機会
- ・相談や、思いを分かち合う場
- ・絵本読みや遊び歌(わらべ唄)
- ・みんなで楽しむクイズ遊び
- ・帰りの集まりでは、今日の振り返りを行うことで遊びが次の日へ繋がるように

## 実践のあゆみ③

## 3)行事の取り組み

～子ども主体の運営～

- ・子どもが司会をし、発表する機会
- ・年長が園の生活を創り上げていく  
運動会・年長お泊まり会  
秋のコンサート・生活発表会  
その他行事(もちつき・クリスマス会等)

## 実践のあゆみ④

## 4)異年齢の交流

～年長が幼稚園のリーダー～

- ・年少のためにどう生活をするといいかを年長が考えるように

年長が年少のお世話  
園庭の遊び・ルール  
週末掃除

- ・遊びを見る見られることにより、真似したいやつてみたいという思いが育ち、一緒に遊ぶことが多くなり、教え合うように  
ケンケン相撲

## 実践のあゆみ⑤

### 5)園庭での遊び

～遊び込める、チャレンジしたくなる環境作り～

- ・自分たちで工夫するようになり、次の日に遊びが続いていくように
- ・身近な自然を生活に取り入れるように

## 4. 教師へのアンケート内容

<2017,2018年実施>

1. 子どもたちは、どのように変わったと思いますか？
2. 子どもの見取り方や視点はどのように変わりましたか？
3. 保育の準備の仕方はどのように変わりましたか？
4. 異年齢の関わりはどのように変わりましたか？
5. 不安に感じること、難しいと思うことはありますか？
6. 声かけで変わったところはありますか？

7. 遊び保育になって、先生同士の連絡・調整はどのように変わりましたか？
8. 遊び保育になって、子どもたちの環境、園の環境、職員(人的)の関係などで、以前と比べて意識するようになったことは何ですか？
9. 遊び保育のいい所、素敵な所は、どこですか？
10. 支援の園児について、遊び保育で変化したことは、ありますか？
11. 日案の記録、支援の園児の記録についてどうですか？
12. バスキヤッチ(メール配信)で保育の様子を送り、保護者は変わりましたか？

## 5. 子どもの変容について

- ・やりたい遊びを自分で探す力がついた。
- ・自立しようと頑張っている。
- ・思考力、想像創造力、表現力等がついた。
- ・友だちと関わる時間が増えた。
- ・遊びの中で友達との関わりや体験を通して自分だけでなく相手を思いやる気持ちが育っている。
- ・ケンカなどの問題を自分たちで解決する。
- ・子どもたち同士で話し合う姿があちらこちらで見られる。

## 5. 子どもの変容について

- ・自分の好きな遊びを見つけて遊び込める時間が増えた。
- ・学年関係なく関わることでコミュニケーション能力が高まっている。
- ・これをしたら危険だという安全な行動の仕方を学んでいる。
- ・子ども同士で教えて合う、助け合う姿も多くなった。
- ・やりたいと思った遊びを自分たちから挑戦しようとし、粘り強く試行錯誤したりし、遊びを作りあげるようになった。

## 5. 子どもの変容について

- ・以前は行事など、当たり前に参加しその時期になると行事に関わる活動が急に始まるといった印象だった。遊び保育になり変わったと感じる点は、行事が子どもの生活の延長上にあるということ。年長児が年中・少を「運動会参加しませんか？」と誘いに行き、司会進行や競技準備など役割分担しながら行事を創り上げ、幼稚園のリーダーという自覚を持つようになった。年中・少児はそのような年長児の姿を見て憧れを抱いている。運動会では年長組のよさこいを遊びの中で一緒に踊る、年中組の組体操を一緒にするなど異年齢での関わりが自然に増えていた。

## 5. 子どもの変容について

<支援の子>

- ・のびのびしている。設定保育では辛そうな場面が多かったように思う。
- ・型にはめられず、一緒にのびのびと遊び、友達や教師に認めてられている。
- ・友達との遊びでの関わりを通じて学んでいるところが一番多いと思います。自分から友達がやっていくことに興味をもったり、友達のことを少しずつ受け入れられるようになった。

## 6. 教師の変容について

- ・集団の中だけではなく、個人的な発達を見るようになった。
- ・結果だけに捉われず、遊びや取り組みの過程を大切にするようになった。
- ・心の動きを感じるように、より子どもたちを見て、必要に応じて共感したり、話をしたりするようになった。
- ・子ども達の行動の背景を理解しようとするようになり、肯定的に受け止められることが増えてきた。

## 6. 教師の変容について

- ・出来る、出来ないで子どもの成長を見取るのではなく、取り組んでいる過程や、どんな事に興味を持ち過ごしているのか等に視点が変わった。
- ・どんな経験をしているのか、どこが成長しているのか、何か必要なものはないかを考えて見るようになった。
- ・制作では、(以前は)先生が材料を作っておいて作ることが多かったが、その機会が減ったと思う。今は子どもたちが何に興味があるって、どのような遊びをしようとしているのかを汲み取ったり、子どもの声を聞いて、準備をしている。

## 6. 教師の変容について

- ・設定保育では、保育が終わってから次の日の制作物の準備をしていることが普通という感覚でいた。それでは子どもたちにとっては突然、元々準備されているものが手元に出てくることになり生活に連続性がなくなっていた。しかし遊び保育では制作するものなども、子どもたちと一緒に準備している。ハサミで切る線を書く、画用紙を半分に切るなど子どもができるとと一緒に準備するため、子どもたちにとっては生活の中から全て繋がるようになっている。

## 6. 教師の変容について

- ・「〇〇をやってね」などの指示が「〇〇ならどうしたらいい？」など子どもたちが自分で考えて動くよう声掛けの意識が変化した。
- ・指導という立場より、子ども自身が考えられるような言葉かけになった。疑問なことがあった時は教師が答えを伝えない。
- ・声をかけるより待つことが増えた気がする。
- ・どう思うか、どう感じたか等子どもの声を待つような声掛けを心掛けるようになった。

## 6. 教師の変容について

- ・子どもたちがどうしたいのか、どう思うのか、を大切に、子どもたちの気持ちを引き出す努力をしている。
- ・学年での話し合いが多くなった。疑問や困ったことはすぐに話し合って相談しあう。
- ・子どもたちの小さな場面でも、普段の会話から話すようになった。学年の枠を超えて。
- ・遊び保育になったからこそ遊びの危険な場所や危険な遊びがないか等を気をつけている。

### 6. 教師の変容について

- ・先生方の保育の負担が減り、残業する事が減り先生たちの心の健康に良くなつた。
- ・子どもの心持ちに寄り添えるよう、担任・副担任で毎日情報を共有している。園庭の環境整備や、部屋の環境構成は話し合い、子どもたちの様子に合わせて常に変えている。

### 7. 今後の課題

- ・自由遊びとクラス集団での活動のバランスをどのようにするか。
- ・職員同士が遊び・生活のねらいを共通理解することの大切さ。
- ・保護者に遊び保育への理解を高める活動。

### 8. まとめ

- ・子どもたちが大人になった時、力強く生きるために、幼児期に何が大切なのか、常に考えること。
- ・自分の保育に満足せず、より良い保育を追求すること。
- ・保育者も子どもも主体的で、楽しく、健康的に園生活を過ごすこと。

ご聴聽ありがとうございました